

科目名	科学技術と社会のメディアリテラシー特論	担当教員	鬼頭秀一
科目属性	専門科目群E	単位数	2 単位 (面接 0.5 単位)
<p>【授業概要】 現代において、社会の事象は何らかの形で科学や技術、科学技術と関わりがある。ところが、その専門的な内容は隣接の分野の研究者でも理解できないほど高度に専門分化しており、その意味でメディアやジャーナリズムの「教育」の役割は大きなものになっている。しかし、一方で、科学技術の専門家も、またそれに関わるメディアも、「客観的な」「正しい」情報を発信する中立的な立場であるとはいえ、社会の中での利害関係者の一つにもなっている。そのため科学技術全般についてその「客観的な」内容も含めて広く社会の中で政治的、社会的に捉え直すことが重要になってきている。「科学技術と社会」のリテラシーが、科学技術者自身、メディア・ジャーナリズムに必要なになってきている。その基本的な枠組みを実践的に議論しながら確立していく。</p>			
<p>【授業の到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 科学・技術のあり方、つまり、科学・技術の成果としての論文等の「事実」、科学・技術の担い手としての科学者、科学・技術の営みについての現在の社会的、政治的なあり方、その歴史的な背景について理解していること。 2. 科学・技術の「客観性」「中立性」についての基本的な考え方について理解していること。 3. 科学報道の「客観性」「中立性」についての基本的な考え方について理解していること。 			
<p>【授業計画】</p> 『科学コミュニケーション論』と『科学報道の真相』を、レポートの課題について意識して、事前に学習していただきます。スクーリングの前半では、その内容の骨子の特に重要な論点を講義で補足し、その上で、討論を行います。スクーリングの後半では、具体的な科学にかかわる報道の事例を、一緒に分析して、そこでの問題点を明確にします。スクーリング受講前でも終了後1ヶ月以内でもどちらでもいいので、4000字程度のレポートを提出してもらいます。スクーリング前と後ではレポート課題の評価の基準は異なります。その添削と評価を踏まえて科目習得試験を受けていただきます。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 科学コミュニケーションの歴史的背景と日本の特質 (第1回～第3回) 2. 科学コミュニケーションにおけるリテラシーとはなにか、 欠如モデルと公共的理解論 (第4回～第7回) 3. 科学ジャーナリズムにおける問題について、フレーミング問題 (第8回～第10回) 4. 客観報道、中立報道の考え方、それについてリテラシー論 (第11回～第12回) 5. 「不確実性」をとらえるあり方 (第13回～第15回) 			
<p>【評価方法】 評価は、スクーリング評価 (25%)、レポート評価 (25%)、「科目修得試験」 (50%) の割合で行います。</p>			
<p>【教科書】 藤垣裕子・廣野喜幸 (編) 『科学コミュニケーション論』 東京大学出版会、2008 年。 瀬川至朗 『科学報道の真相-ジャーナリズムとマスメディア共同体』 (ちくま新書) 筑摩書房、2017 年。 山脇直司 (編) 『科学・技術と社会倫理-その統合的思考を探る』 東京大学出版会、2015 年。</p>			
<p>【参考図書】 『ジャーナリズムは科学技術とどう向き合うか』 東京電機大学出版局、2009 年。 『科学の不定性と社会-現代の科学リテラシー』 信山社、2017 年。</p>			